



笑いの渦から
男女共同参画を訴える

熊本県大津町・ほりだし劇団





熊本県大津町（おおつ）文化ホールでの公演を翌日に控え、夜の十時過ぎまで稽古をしたあと呑み会となった。談たまたま、洗濯物の干し方に話題がおよんだ。「最近、洗濯物を干すようになった」という男性陣に対し、「でも、干すとき洗濯物をバタバタとたたかないから、取り込んだあと、しわしわを伸ばすのがたいへんなのよ」と女性陣が切り返す。

一年ぶりの公演となるほりだし劇団の演じ物は「生活劇 そぎゃんこつばいう たつちゃ」。亭主殿が洗濯物を干すという行為は、この劇でも重要な役割を果たしている。劇は造園業を営む白川家のお話。

白川家の姑のかめさんが、嫁いだ娘雅子さんの家を訪ねる。雅子さんは旅行中で不在。娘婿の和彦さんが、育児休暇を取得中で、幼子を背負い、洗濯物を干している。かめさんは、その姿をみて腰を抜かす。しかし、優しい夫をもつて、雅子は幸せ者と思う。

一方、かめさんが留守の白川家では、ご主人時次郎さんの日頃の態度に業を煮やした奥さんのすみれさんが、「私を大事にして、思いやって」とこんなことと説



得する。その場では「ウンン」と唸りつつも、根はやさしい時次郎さん、翌朝、気持ち切り替え、洗濯物を干し始める。そこへ、娘の家から帰ってきたかめさん、洗濯物を干す男の姿をみて再び腰を抜かす。ただ、娘婿とは違い、男が洗濯物を干すなんて世間体が悪いと、無理やり洗濯籠を息子から取りあげる。

ほりだし劇団は、平成十二年この地の農家に嫁いできた女性を中心に立ち上げた劇団。ほりだしとは、地元の名産のからいもの別称で、「掘り出す」という意味もかけた。発足以来一貫して主張してきたのは、男女平等、男女共同参画社会の実現。

「男は仕事、女は家庭」「介護は嫁や娘の仕事」「話し合いは男性、接待は女性」と社会に根深く残る差別の風潮や慣行を変えたい、そんな想いから、劇団活動をはじめた。日中、夫婦揃って畑仕事をしても、家に帰ると、夫はひと風呂浴びくつろぐのに、妻は夕餉の支度に追われる。そんな毎日の生活のなかで見過ごされている行動や会話の断片を引き出し、男女間の差別の様をえぐりだしていった。

最初は、講演の前座を務める十五分は



どの寸劇。母親に寝込まれたときの男女の役割分担などを劇にした。その後一時間ものの旗揚げ公演や依頼公演を受けて、劇団活動を展開している。

そして、劇団の幅を広げていったのが男性陣の参加。肥後もつこすといったら頑固一徹な、一本気なという熊本県男児を象徴する言葉だが、それに負けずおとらず、ほりだし劇団の女性陣もしたたかさを持っている。「出る杭は打たれる」の喩えどおり、劇団活動に批判的な声も上がりはじめたという。そんな雲田気のなか、味方につけたのがご亭主たち、そして、これと思う男性を一本釣りで劇団員に引き入れていった。当時教育委員会の委員長だった西さん。ゲスト出演で、舞台上に登場したのを機に劇団員となってしまった。郵便局長で、今回和彦さん役やファイナーレーでマツケンサンバを踊った式森さんもそんな一人。「仕事では立场上、命令をしたりするが、ここでは、女性の手のひらに乗ってあげればいから、楽です」と式森さんは言うが、開演前の舞台裏で、ブツブツとセリフを呟く姿は、真剣そのもので、近寄りがたい雲田気を醸しだしている。

男性参加の効用は、男性が男役を演じ



連絡先

ほりだし劇団座長
吉田春代さん

〒869-1221
熊本県菊池郡大津町陣内33

といるということにとどまらない。冒頭に紹介したように、洗濯物の干し方一つをとっても男女では捉えかたが違う。その違いがシナリオづくりに活かされているといえよう。

劇団が町民に与えた影響は大きい。笑いと皮肉で包んだ劇を観た男性も女性も、それぞれの生活のあり方を変えていくようになった。町の委員会にも女性が就任するようになった。座長の吉田春代さんは、義父の照さんから養子のお話をもち込まれ、縁組をした。演劇経験があるという照さんは、劇団の団員でもある。

上演後のアンケートで「一皮向けた男女共同参画」という意見があった。たしかに声高に叫ぶよりも、ユーモアに包まれた劇は、観客の胸にズッシリと届く。